令和 4年度　上伊那圏域地域自立支援協議会議事録

<table>
<tr><td rowspan="2">会議</td><td>部会名</td><td>第 1 回　重心・要医療的ケア部会</td><td rowspan="2">参加者数</td><td rowspan="2">28 人</td><td rowspan="2">会場</td><td rowspan="2">ZOOMによるWEB会議</td></tr>
<tr><td>日時</td><td>令和　4　年　8　月　19　日（金）
15:30　～　17:15</td></tr>
<tr><td>主テーマ</td><td colspan="6">1 「看護師の役割と保護者との関りについて」 児童発達支援センター　にじいろキッズらいふ
看護師　小林　紀子　氏
2 各機関や現場で活躍する看護師の役割や課題等について(情報共有・意見交換)
3 「長野県医療的ケア児等支援センター」について　長野県医療的ケア児等支援センター
副センター長　亀井　智泉　氏</td></tr>
<tr><td></td><td colspan="6">1 地域で生活する医療的ケア児に対し、現場で活躍している看護師等の役割の発表
①一人一人に合った医療的ケアの提供
②親の医ケアに対する“大丈夫”と看護師の“大丈夫”は意味が異なるので医療連携は必須
③家族、専門職と連携して、身辺自立だけでなく医療的ケアの自立を促す必要がある。
④医ケアも大事だが発達支援も同時にやっていくことが大事
⑤個別支援計画を作成する際はPDCAサイクルを意識し、関わる専門職も同じ目標を持って支援する。
⑥チーム支援が子の育ちに有効と考えている。

2看護師の役割等の情報共有と意見交換
・来年度、教育機関に人工呼吸器の子の受け入れが予定されている。看護師も教員も初めてのことで不安が大きい。その中で看護師としてどう介入するか、教員との意見のすり合わせが難しい。
・医療機関で働いてきたが福祉や子どもの分野は初めてなので、一から調べてやっている状況である。まずは安全に過ごすことで精一杯で、発達支援等はまだまだである。
・これでいいのか等看護師が相談できる場がない。支援の全体をつかめず手探り状態である。
・病院でしか働いたことがなく、(児の行動を)手伝って当たり前と思っていた。教育現場は自立を目指していく必要があり手を出し過ぎていたことを学校の先生に教えてもらった。
・保育園では看護師一人なので、導尿が必要な児への熱中症対策や水分量のバランスなど難しいこともある。
・母親の意向に沿わない支援が難しい傾向にある。母親が身に付けてきた手法等の危険性を助言しても変わらなかった。家族の思いが一番になってしまい、児への支援の難しさを感じる。

3「長野県医療的ケア児等支援センター」の役割等の説明
・ここでいう医ケア児とは、医ケアが必要でなくなった後も医療機関との連携が必要な児及び今後医ケアが必要になる児である。18歳を過ぎても対象としている。
・役割は、専門的な相談・助言、医ケア等の情報提供や研修の実施、関係機関との連絡調整等である。
・開設から7月末までの相談件数は80件であった。内容は、家族からの「預かり」ニーズ、学校の支援体制の格差等、就園・就学、自立支援、主治医との連携ニーズに関すること等であった。
・今後は、医療的ケア児等支援スキルアップ研修にも力をいれていく。</td></tr>
<tr><td>まとめ</td><td colspan="6">医療的ケアに関わる看護師の役割及び支援の難しさ、困ったときの横の繋がり等確認できた。地域の中だけでは解決出来ない際のバックアップとして、長野県医療的ケア児等支援センターの役割を確認した。</td></tr>
<tr><td>次回</td><td colspan="6">令和4年　10月20日(木)　16時～
記録</td></tr>
</table>